博物館学雑誌 第34巻 第2号（通巻50号）97～106ページ 2009年4月

【研究ノート】

文学館として見る万葉植物園

Manyo botanical gardens as Literature display

渡邉 真衣※

Mai WATANABE

はじめに 万葉植物園と文学館

「文学館」という名称は現在、文学者の記念館、地域と文学との関係性を紹介する地域博物館、日本近代文学館に代表される文学館など、文学に関係した展示を行う施設の総称として用いられる。全国文学館協議会の会則では、文学館と言う施設を「わが国の文学に関する文献・資料の収集・保管、閲覧、展示等の事業を行っている、またはこうした事業を行おうとしている、施設または組織」と定義しており、これによると文学・文芸に関する作品・作者・研究者などに関連したテーマを有する施設組織であれば、全て文学館であると考えられる。木原直彦が作成した文学館のリストには一部の専門図書館、文学系の書籍を有する文庫、出版・印刷に関する博物館も含まれているが、上記の定義ではこれらも間違いなく文学館に相当する(1)。文学の関係する範囲が非常に広いものであるために、このような広義の文学館は現在認識されている文学系博物館の範囲を超えて広がる可能性がある。

勿論これは極端な考えであって、こういったものを全て文学館のカテゴリーに分類することは難しく、又意味のない作業であろう。しかし、文学という無形の世界をどのような視点から形にし、展示するかを考えることは、文学館を考察する上で決して無駄ではないと考える。

本論では、広義の文学館の一例として、全国に存在する万葉植物園を取り上げる。

万葉集中4500余首の内、およそ1700首の歌に詠みこまれている植物約160種～170種（他説の該当植物を全て含めれば約300種）を万葉植物と呼び、万葉植物を栽培・公開する植物園および植物園的施設を万葉植物園と呼ぶ。これは植物という視覚的な資料を通して万葉集の世界を展示するものであり、利用者が万葉集に対する興味を持つ機会を作る場になり得る。してみると、「わが国の文学に関する文献・資料の収集・保管、閲覧、展示等の事業を行っている」万葉植物園は、文学館そのものではないにしても、文学館的機能を備えていると考えられる。

なお「万葉植物」は万葉集に見られない菊、牡丹などを含む「万葉の時代の植物」の総称とする場合もあるが（桜井満 1984)、ここでは「万葉集中に表現されている植物」という狭義の意

※ 国学院大学大学院

味で用いる。

1．万葉植物研究略史[2]

現在の万葉植物園を支えているものは、過去の万葉植物研究の累積である。正しい考証がなされず間違った植物を展示するようでは、万葉植物園という施設には何の意味もないどころか有害になりかねない。万葉植物の研究史も、集中の植物が現在の何に相当するかという考証に始まる。

万葉集の研究自体は平安時代に開始されているが、万葉集の観察、記紀・風土記等の文献調査による科学的研究が行われ、万葉研究の基礎が作られたのは鎌倉時代の仙覚以降である。断片的な万葉植物の研究は、この頃に始まったとも言えるだろう。例えば仙覚が「万葉集註釈」中で、1巻7番歌[3]に見える「ミクサ」について「ミクサトハ、スヽキ也。」と述べるように、用語に対する註釈の一つとして植物に触れる例がある。しかしこれらは厳密な意味での万葉植物の研究とは言えない。

万葉植物の研究は、江戸時代後期の1800年代に本居宣長の門下およびその学統を中心に盛んになった。この時期は万葉集の研究自体が註釈に留まらず様々な専門分野に分化し、植物の研究もその中から始まっている。

代表的な研究には、鹿持雅澄の『万葉古義』中にある「万葉集品物考」が挙げられる。これは「集中に出たる、草木鳥獣魚蟲のあるかぎりは、一首だに漏さず」考証を加えたものであり、植物は草類86種・竹類4種・木類66種を収録する。純粋に植物研究として評価した場合には異論もあるが（松田修　1970)、近世万葉集研究の綜合集成である。

この他に「万葉名物考」（作者不明)、伊藤多羅の「万葉動植考」（1822以前？)、西門蘭渓の「万葉草木考」（1838-1841）などが著されたが、いずれも万葉植物を取り上げて考証、解説を加えたものであった[4]。

国学自体は近代に入って下火になるが、アララギ派歌人らによって万葉集の再評価が進められると万葉集研究もまた盛況となり、更に様々な方面からの研究が進められるようになった。万葉植物の研究としては、大正期に山本章夫の「万葉古今動植正名」（「万葉古今ニ動植正名」1926）が出版され、昭和に入ると豊田八千代、岡不崩、松田修、小清水卓二、若浜汐子等が相次いで研究を発表している。

この時期の特徴は、国文学以外の専門家による研究が始まったことである。松田、小清水など植物学を専門とする研究者が現れたことで、従来文学専門の研究者に偏って行われた万葉植物研究の自然科学的な部分が補強されたと考えられる。松田の『万葉植物新考』（春陽堂，1934)、またその7年後に出版された小清水の『万葉植物　写真と解説』（三省堂，1941）は、著書の中に植物の生態写真を加えた初めての例でもあった。

また、植物名の吟味・考証に留まらず、万葉植物を通して上代の自然観・風土・生活・植物の民俗などを考察する研究が始まるのもこの頃である。

2．初の万葉植物園

最も古い万葉植物園は、恐らく奈良県の春日大社神苑であろう。この施設はおよそ9000坪の敷地を持ち、約600坪の池を中心に設計された万葉歌園、人里で栽培された有用植物を中心とする五穀の里、20品種200本の藤を系統的に栽培する藤園、250本の椿を有する椿園等からなる。規模においてもわが国屈指の万葉植物園である。

万葉歌園は池を巡るように敷かれた遊歩道に沿って、異説を含め約300種の万葉植物とそれを詠みこんだ万葉歌を展示する。園内には他に奈良の地や万葉を詠んだ歌碑、年に2度雅楽が奉納される浮舞台、大社の本殿に向かって設置された遥拝石などが設置されている。

神苑の前身である奈良万葉植物園設置の直接のきっかけとなったのは昭和2（1927）年春の、大阪朝日新聞社による天平文化宣揚運動である(5)。この運動は昭和3（1928）年の天平改元1200年を記念するものであり、その為に奈良県、そして天平文化との関わりが深い万葉集をテーマとした植物園が提案された。

ただし奈良公園における植物園設置の構想そのものはより古く、明治末に青木良雄知事らによる奈良公園改良計画から既に存在している。

林学博士本多静六による明治42年（1909）の講演会で発表された計画では、「人工的花園（ブルーメン・ガーテン）」、「自然植物園」の2点が提案された。この内ブルーメン・ガーテンは「概シテ地味ニシテ華ヤカナル風景ニ乏シキ当公園」に於いて来園者の目を楽しませるものであり、四季の花を蒐集栽培する他、休憩や喫茶のできる小亭を設置し、また草花の販売も行う観光施設である。自然植物園は「主トシテ学生等ノ調査研究スル資ニ供スル」目的であり、観光客も自由に散策できる学術研究施設だった。

同年11月、奈良公園改良諮詢会で可決された改良案では本多の案を更に進め、「春日野御料地を拝借し、植物園を設置せんとす」「鶯の滝付近に於て、自生の樹木を利用し、之れに各種の樹木を植え添え、天然植物園を設けんとす」という計画になっている（『奈良公園史』　1982）。

運動場設置など他の計画が先に進められたために、植物園の設置は後回しにされていたが、天平文化宣揚運動との関わりで万葉植物園の新設が提議され、春日社境内の旧鹿苑を植物園にあてることも決定した。昭和4年（1929）5月には万葉植物園期成会が組織され、昭和5年（1930）には着工、2年後には完成をみている。

現在の神苑の形がつくられるのは、開演50周年記念として昭和58年（1983）に竣工された整備事業以降である。同年7月には入口の門、受付、休憩所（荷茶屋）が完成し、翌年4月に五穀の里が竣工。更に平成2年（1990）には南に隣接して藤園、椿園、西には花菖蒲園が完成した。実際に「神苑」と改名したのは平成9年（1997）春であり（園内の標識より）、11月に「神」の文字を刻んだ遥拝石の清祓並びに除幕式が行われた。

3．奈良県立万葉植物園の構想と実際

奈良万葉植物園の計画は昭和2年以降、資金不足などの理由から一時凍結しかけている。この

時、各方面に呼びかけて万葉植物園期成会の結成に尽力した一人が万葉学者の佐々木信綱だった。

佐々木はこれ以前から万葉博物館とそれに附属した万葉植物園の構想を温めており、昭和2年の時点では「萬葉博物館建設私見」と題した案を発表している(6)。

佐々木の言う「万葉博物館」とは、写本、版本、断簡、また校勘、註釈などの典籍、論文及び研究書、国外で発表された翻訳、研究等を収蔵し閲覧に供する図書館を備え、更に集中に詠われるものや当時の風俗を示すものの実物（レプリカを含む）、地理、歴史に関する資料はもちろん、万葉歌人から後世の万葉風歌人や研究者まで万葉集に関わった人々の肖像、筆跡、稿本等を幅広く収集展示する総合的な博物館である。この中で植物園は「萬葉関係の植物を網羅して培養し、一つには植物の實物研究に資し、一つには風致を添へる」目的のために博物館に附属するものだった。「風致を添へる」とは、植物を栽培することで人の目を楽しませる程度の意味であろうが、「実物研究に資」する目的から見ると、万葉博物館の実物資料的な期待をかけられていた可能性もある。

現在に残る正倉院の御物、社寺堂塔など「目に見得る上代の藝術品」に対して、万葉集を「心の目にのみ見得る芸術的作物」とする佐々木は、「その藝術的作物を、或意味に於いて目に見得るやうにするのが、萬葉博物館のつとめである。」と述べ、展示を通じて文学の世界を伝えることを考えている。この考え方は非常に文学館的と言えるだろう。

昭和の初期における日本の文学系博物館は、古典籍を有する文庫や資料館の他に、早稲田大学坪内逍遥博士記念演劇博物館（1928）や島根県松江市の小泉八雲記念館（1933）がようやく登場した頃である（駒見和夫　2005）。佐々木の思う万葉博物館が実現していれば文学館の歴史上注目すべきものになったかもしれない。

残念ながら万葉博物館の設立は実現しなかった。その代わり植物園内に植物標本・参考資料・文献等を収蔵展示する資料館を設置する計画であり、植物園の設計に当たった大屋霊城も「西苑の入口に標本陳列館を設くる為約七十坪の空き地を保留」していたが、これも戦争で中断している(7)。

さて植物園そのものの計画について、大屋は「萬葉集にあらはれたる植物を蒐集し、是を陳列する方法を考慮したる外、人をして萬葉の面影を偲び、恰も自らその時代に遊ぶの感を起さしむる趣向を旨として其の内容を整へたり。」と述べている。これによると設計者が目指したものは、①万葉植物の蒐集と植物園的展示と、②万葉時代の雰囲気を来園者に伝える庭園であった。

万葉の雰囲気を来園者に伝える為に大屋が選んだのは、万葉時代に近い「平城平安頃の造園手法」だった。当時に近い庭園に当時の植物を植栽することで万葉の面影を甦らせようという試みだが、万葉植物園と古代の庭園の両者を両立させることが不可能に近いことは設計当時から問題となっていた。庭園の植栽は全て万葉植物に限ることになっていたが、万葉植物には純然たる観賞植物よりも野草や実用的な用途に用いられる植物が遥かに多く、ごく一部を除けば平城・平安期の庭園に植栽されることはあり得ない。

大屋は標本として各種必ず一本（一株）栽培する他、桜、楓などの「風致木」を景観材料とし

て植栽し、「標本植物」は外見に合わせて、栽壺（樹木）、四ツ目床（鑑賞に適した草花）、鉢壺（水草又は鑑賞に適さない草）に植え込んで名札をつけ、風致木と区別している。これらの工夫が標本植物を判別し易くすることは確かだが、万葉の風情を催すかどうかは疑問である。

黒岩康博が当時の庭園における植栽植物の好みが現在の万葉植物園とは全く違ったものであったことを指摘し、「池を囲んで250種の植物が所狭しと並ぶような空間は、決して天平時代には存在しなかったのである。」と、万葉学者と造園家の植物園構想のずれについて論じているように（黒岩康博　2008）、万葉植物を全て植え込んだ庭園は、即万葉時代をよみがえらせる空間とはならない。

4．東京都の万葉植物園

國學院大學万葉の花の会の調査によれば、2004年の時点で万葉植物園は全国に72箇所、東京都内には10箇所存在する(8)。この中には公園、緑道、庭園、野生植物の保護地なども含まれており、必ずしも植物園の形をとるものではない。

ここでは万葉植物園の例として、都内に10ヶ所ある万葉植物園の内７箇所を挙げた。

以下の施設は全て、植物ラベルの表記に万葉名と例歌一首を含む。大抵の植物標識が、和名、ラテン名、分類、分布、花期など自然科学的な特徴を表記するのに対して、万葉植物園では奈良万葉植物園からこの形が定着している。

その他の施設は公園と、野生植物の保護地であり、万葉集に関する展示は見られなかった。

①国分寺市　国分寺万葉植物園

境内及び本堂裏の丘を含む約8000平方メートルの区画で、万葉植物163種と、約700種の植物を栽培する。これらの植物は、当時の住職星野亮勝氏によって1950年から1963年までの約13年間をかけて採集されたもの。万葉植物にはそれぞれ、万葉呼名・現在の名称・例歌・作者を表示した解説板を添える。

②町田市　薬師池公園万葉草花苑

1988年に、薬師池公園内に設置された。1600平方メートルの庭園内で、万葉植物70種、その他植物260種を栽培し、それぞれに植物名・種を表示する。また一部の万葉植物には万葉名・例歌・作者名・花期を加えた立札をつける。冬季（11～３月）および毎週火曜日は休苑となる。

③東村山市　市立秋津図書館図書館園

図書館の中庭に円卓、ベンチなどが設置され、野外での読書が可能な図書館園になっている。図書館園の一部では万葉植物を栽培し、万葉名・現代名・種・例歌・作者を表示する。図書館の休館日には閉鎖される

④足立区　白旗塚史跡公園

1987年、伊興古墳群のひとつである白旗塚古墳の周りに池をめぐらし、公園としたもの。

約3,000㎡の園内に約30種類の万葉植物を栽培している。

⑤板橋区　区立赤塚植物園万葉・薬用園

植物園の拡張に伴い、1986年に開設された。万葉植物およそ170種、薬用植物およそ50種を、山地の植物、湿生の植物、草原の植物に分けて栽培している。解説板の一部には万葉・薬用注記があり、アジサイ、キキョウのようにどちらにも当て嵌まるものもある。

事務局内の相談コーナーには植物標本、参考図書などの資料を揃えてあり、万葉植物関係の図書も用意されている。

⑥杉並区　区立向陽中学校万葉植物園

向陽中学校の創立40周年記念事業として、PTA、向陽スポーツ文化クラブ（略称KSCC）の協力を得て、1987年に開園した。校庭の一部と区の遊歩道に面した幅3メートル全長100メートル弱の区画で万葉植物を栽培し、歌と植物名を記した解説板は学校の内外両面から見られる。

植物園の管理は学校内にクラブハウスを持つKSCCが行う。

平成3年2月に杉並区第2回町デザイン賞に入賞。平成5年2月には杉並区政施行60周年記念事業である「杉並百景」に選ばれた。

⑦世田谷区　万葉の小径（烏山川緑道内）

烏山川緑道全長約7kmの内、約100メートルの区画を万葉の小径として、万葉植物を栽培している。

「世田谷区公園等の住民参加による管理に関する協定要綱」に基づき、清掃等の管理は地域団体が行う。

5．植物園としてみる万葉植物園

以上の通り、万葉植物園は規模も施設の性質も一様ではない。現状においては、植物園・公園・庭園といった施設全てが「万葉植物園」と呼ばれているが、わが国において「植物園」と呼ばれる施設そのものも多岐にわたる。このことは、植物園発達の流れを振り返ることでより明確になるだろう(9)。

岩槻邦男は「記録でたどることができ、誰でも納得する日本における植物園の始まり」として現在の東京大学理学部附属植物園（通称小石川植物園）の元となった徳川幕府の薬園を挙げる。江戸時代の文教推奨の元、学問が隆盛した中で医薬の研究も発達し、その一方で唐薬の流行による贋物の横行など問題が生じた。薬園はこれらの事情から、良薬を得、薬種の真偽を正し、薬効を研究する目的で設置された。江戸期にはこの他に、藩立、私立の薬園が設置されている。

近代植物園が日本に導入されたのはそれより後、明治期に西洋の科学が輸入され、定着してからのことである。先の小石川植物園は元から、植物の研究、収集、恐らくは各地の薬園への普及といった機能を持っていたが、これ以降は更に欧米、熱帯、亜熱帯の各国から齎された植物を導入し、各地に伝播させる役割を負った。また明治５年（1872）設立の新宿御苑など、学術研究機能を持つ初期の植物園がこの時期に設立された。

第２次世界大戦が終結した1945年以降、植物園及び類似施設は増加した。この多くは公園的な施設であり、植物園は自然に親しむ憩いの場としての機能を強めることになる。

日本植物園協会が2007年度に実施したアンケート調査によると、「貴園はどのような施設に相当すると思いますか」（複数回答可）の設問に対して最も多かった回答は「公園・庭園型植物園」であり、解答した273園の内93園が選択している。この数値は次いで多い「薬用植物園」の51園、「研究植物園」「都市緑化植物園」の39園を大きく引き離している（日本植物園協会　2008）。前述した万葉植物園にも、利用者の目を楽しませる庭園や花壇に万葉集の味付けを加えたものに留まる事例が多いが、これは日本における植物園全体の傾向であるようだ。

しかし岩槻が、植物園に最も期待される内容は社会教育、詳しく言えば「植物多様性について市民の理解を陶冶し、それが人間社会とどのようなかかわりをもつかを適切に示し、市民の学習を期待することである。」と述べ、市民の憩いの場に留まらず「公園より一歩進んだ思索の場」となり得る可能性を示すように（岩槻邦男　2002）、植物園は植物を通した情報発信の場であることが望ましい。同じ日本植物園協会の調査で、活動内容に関する設問の「最も力を入れている活動」についての解答で、第１位が「展示・公開」の105園、続いて「教育・普及」の52園（246園の内）となっていることから考えても、植物園の情報発信に関する意識は高い。

それでは、万葉植物園においてはどのような情報を発信するべきだろうか。

万葉植物園という施設に共通しているのは、万葉植物の栽培と公開を行う点である。万葉植物の基準は万葉集という歌集にその名が収録されていることであり、生育環境や植物学的分類などの根拠にはよらない。若浜汐子が「文学作品個々の中に生かされている植物は、その作品から抽き出しては意味がない」と語る通り（若浜汐子　1965）、万葉集を離れては万葉植物も万葉植物園もあり得ないと考えるべきだろう。

国分寺万葉植物園がその設立動機を「（武蔵国分寺建立）当時万葉の歌人たちが植物に託してその心を歌った感情、そして当時の人々の考えや生活などを、植物を集めることによってしのび、生かしておきたいという考えからである。」（星野亮勝　1963）とするように、万葉植物園の目的は単なる植物の陳列に留まらず、万葉集、更にはその文学世界、それらを育んだ文化を知ることである。

おわりに　文学館としての可能性

現在も鑑賞、建築・工芸の用材、食料など、人間の生活と植物は切り離せないものであり、文学作品において植物が重要な意味を持つ例も数え切れないほど存在する。しかし高木市之助がわ

が国における文学と風土的環境（或は自然環境）との関わりの原点を万葉集に見出し（高木市之助　1952)、また佐々木信綱が「万葉人は、殆どすべてというてよいほど、全生活的な愛をもつて植物を詠んだ」（佐々木信　1956）と述べるように、万葉の昔において人と植物はより親密であっただろう。

作者と読者の間には常に、思想、生活習慣などの様々な差異が存在し、それは時代、地域といった両者の距離が開くほど大きくなる。発信する作者が常識と考えている内容が受け取る読者に理解できないといったすれ違いは、同一に近い環境に身を置いていたとしても常に起こりうる事態であろう。時代、地域、風土、社会などは作者の思想に影響を与え、そこから生み出される文学世界を形成するものであり、故に読者が作品を深く理解しようとするならば、作者を取り巻く環境を知ることは不可欠である。万葉植物園は、自然環境を展示することで文学を知る施設、即ち文学館と言える。

しかし万葉植物園が、生きた植物を植栽、公開する植物園である以上、文学展示としての展示にある程度制限が生じることは避けられない。

第一に、植物は季節によって変化するものであり時期によっては見られないという問題である。設備の揃った植物園であれば定期的な植物の入れ替えを行うという対策も考えられるが、管理の行き届かない小規模な施設では難しい。美観を第一とするならば、薬師池公園の例のように冬季には閉鎖するのも一つの方法であろう。

第二に、植物が主体であるために附属させる情報が限られることである。人と植物の関係も様々であって、用途の上でも食用、薬用、繊維、染料、建築材、工芸材などに細分化できるが、これらの情報は、植物と例歌のみでは充分に示せない。また百種を超える例歌が存在する萩（141首）や梅（118首）なども、実際に展示する上では一首しか表示できないのである。

全ての情報を無理に表示すれば、徒らに利用者の負担を増やす結果となることは疑いようがない。橋本保はこれを指摘した上で、「詳しいことを知りたい人には本などすぐれたメディアにまかせるべきである。」と、植物以外の部分で補完する方法を示唆する（橋本保　2001)。興味の喚起に留まらず、万葉集の世界に対する利用者の更なる理解を深めようと志すのならば、更に図書、標本、模型などによる補足が必要となるだろう。

実用鑑賞用の別なく一箇所に纏めて栽培せざるをえない、奈良万葉植物園以来の問題もある。

とは言え、植物の生きた姿を見てその実態を知ることは間違いなく有意義である。

上原敬二は植物園におけるテーマの必要を指摘し、自然科学的分類から外れた共通テーマによる植物園が作品に興味を持つものや研究者にとって非常に有益であると述べる（上原敬二1987)。歌人であり国文学者でもあった若浜汐子が自宅の庭で万葉植物の栽培を行っていた例もあるように、実際の植物の観察が文学の享受者に与えるものは大きい。

万葉の昔と現代においては様々な物事が異り、植物についても同じことが言える。万葉名のアサガホ（桔梗とする説が有力）のように、植物の名称は時代によって変化することも多い。また万葉植物は大半が日本に自生する植物だが、中には環境の変化などの理由から身近ではなくなっ

た例もある。これらは万葉集中に掲載されている歌のみを鑑賞しても植物の実態が想像しにくく、万葉歌理解の実物資料としても万葉植物そのものを展示する意味は大きい。

植物を通して万葉集、更にその背後の文化を知ろうという明快なテーマを持つ万葉植物園は、故に社会教育機能を備えた植物園、更には文学館に到達する可能性を持つと言えるだろう。

引用参考文献

岩槻邦男　2002「植物園に期待されること」日本植物園協会誌No.36　日本植物園協会.

上原敬二　1987「植物園とは」『日本の植物園－1987』日本植物園協会（昭和29年度日本植物園協会会報より転載）.

黒岩康博　2008「奈良万葉植物園の創設過程」『ランドスケープ研究』71(3) 日本造園学会.

駒見和夫　2005「文学系博物館小考」和洋國文研究40　和洋女子大学国文学会.

桜井満　1984『万葉の花：花と生活文化の原点』雄山閣.

佐々木信綱　1956「万葉集と植物」『佐々木信綱文集』.

高木市之助　1952『日本文学の環境』河出書房.

奈良公園史編集委員会編　1982『奈良公園史』第一法規.

日本植物園協会編　2008『日本の植物園総合報告書～植物園の現状と課題～』日本植物園協会.

橋本保　2001「望ましい植物ラベルとは？」日本植物園協会誌No.35　日本植物園協会.

星野亮勝　1963『国分寺万葉植物園』.

松田修　1970「万葉植物研究書史」『増訂万葉植物新考』社会思想社.

若浜汐子　1965「万葉植物案内」『万葉植物原色図譜』高陽書院.

註

(1) 木原直彦編　2005「全国文学館等一覧」『全国文学館ガイド』小学館．より。

(2) 万葉集の研究史は、

大久保正　1967「『万葉集』の研究史」『和歌研究史』桜楓社.

平野仁啓　1973「万葉集の研究史」『万葉集講座　第1巻』有精堂.

松田修　1970「万葉植物研究書史」『増訂万葉植物新考』社会思想社.

若浜汐子　1965『万葉植物原色図譜』高陽書院．などを参考にしている。

(3) 秋の野の　み草刈り葺き　宿れりし　宇治の宮処の　仮廬し思ほゆ（額田王）

(4)『未刊国文古註釈大系　第二巻』（清文堂，1938）に収録。

(5) 万葉植物園の歴史は引用参考文献のほか、

春日大社編　1995『春日大社のご由緒』春日大社.

奈良市史編集審議会編　1971『奈良市史　自然篇』奈良市．などを参考にしている。

万葉植物園の創設に至る過程及び関係者の動向は、黒岩康博の論文に詳しい。

(6) 佐々木信綱の万葉集博物館構想については、

佐々木信綱　1927「万葉博物館建設私見」『万葉漫筆』改造社．を参考とする。

(7) 大屋霊城の設計計画については

大屋霊城　1930「萬葉植物園の設計に就て」『造園藝術』1ノ3．を参考とする。

(8) 萬葉花の会　2004『植物で見る万葉の世界』萬葉の花の会事務局．

(9) 本邦植物園の歴史は

岩槻邦男　2004『日本の植物園』東京大学出版会．

上田三平著；三浦三郎編　1972『改訂増補　日本薬園史の研究』渡辺書店．

川上幸男　1981『小石川植物園』郷学舎．（川上幸男　1981）を参考とする。